# 令和7年度第1回推進会議での意見を追加整理

赤字は追加、黄色塗は再度話題となったこと

資料1

| ①<br>コミュニティの運営 | コミュニティ活動への参加<br>②有償活動の整理 | ③構成員・関わり方 | ④<br>コミュニティ・交付金の周知 |
|---|---|---|---|
| 交付金を活用してどんな効果があったのか | 交付金を使いやすくする（柔軟性） | 隙間時間お手伝い参加のあり方 | SNSの活用（世代に合わせた周知方法）の必要性 |
| 事業に何人参加しただけではなく、事業をしてどんな課題解決に繋がったのかを示してもらうべき。 | 市全体に情報が伝わってから、呼びかけられる | 構成員以外の関わり（裾野の広げ方） | 住民が「自分ごと」と感じる周知が必要 |
| ＰＤＣＡの振り返りが必要 | 「ボランティア」という言葉だけで背負うには重たい課題を担っている | 組織に属さない活動(個人活動)の巻き込み方 | 自慢大会の開催（交付金の使い方） |
| 身近な事例を示して、効果を感じさせる | やりがいだけが活動源では持続が厳しい、参加しない | 地域学校協働事業（市関連所管）との連携 | コミュニティが全住民対象だと知らない |
| やってみたが効果の無いものは断捨離（地域別計画からも消す） | 最低賃金にすると≒仕事、逆に無関心層が増える可能性 | 地域別計画の策定への関わり | 地域別計画を知らない、知られていない |
| 効果の測定は本来なら住民でしてほしい | 隙間時間（地域のために使える時間）でのお手伝い | 自治会との関わりのあり方、役割分担 | 交付金(性質)を知らない、知られていない |
| 事務局のあり方検討 | 地縁にも専門性や責任性が必要になってきているので対価は必要 | 関わる人で運営できる仕組みを作る | チラシ、捨てられない工夫（見ない人への対応） |
| 物価高騰への対応 | 有償化への取組みは地域別計画に記載されるべき | 若手人材（担い手）不足 | 裾野を広げる周知のあり方 |
| 地域別計画が本当に役に立っているのか、どんな課題があるのか調査できれば良い | こんな大変なことに、貴重な時間を使って活動してもらっているので対価を払っていると分かれば、肯定的に捉えられる | 部会ごとの繋がり、交流 | 参加して自分は何をするのか分からない、参加するための情報をどこから得れば良いのか |
| 自慢大会（各コミの特性・注力事業や売り） | 既存の事業を有償化していく場合の有償・無償の範囲や公平感、切り分けが難しい | 住民みんなが構成員だと知ってもらう（自分ごと） | 自分ごと目線の周知が必要（実績だけを記載した機関紙では×） |
| 自由度は高いはずの制度が既得権で縛られているような状態（変更が難しくなっている） | 学生ボランティア（学生との関わり） | 受動的な人の巻き込み方（誘われたら案外参加する人はいると思う） | 交付金は自分のお金だと思ってもらう |
| 地域差に応じた運営整理が必要 | 見せ方（僅かな報酬に対してお金をもらっているのだからという視線にならない工夫） | 活動する方も専門的な知識が必要であれば研修を受け、円滑な運営に繋げる | どう使われているか知ってもらうための最低限のルールが必要 |
| 運営に関わる方の交流やサポートの場が必要（会長以外にも広くサポート） | | 地域に必要なサービス＝地域の人で担うではなく、外部から提供、協力してもらうのもひとつ（マッチング制度の利用、地域企業との関わり方の工夫） | 街灯の改修にいくら活用した等、自分に近しいところで、どれだけ交付金が使われたのかなど、会計報告も分かりやすくする |
| | | コミュニティと自治会の関係性の再整理(地域に応じた関係性を踏まえる) | どんな些細な機会でも徹底して「交付金で実施」「実施の目的」「全住民対象」を伝える |

**4つの視点以外→市の役割（参画協働課だけではない全市的な繋がり、支援のあり方）**